

# 日米医学医療交流財団 医学部夏期集中医学英語研修プログラム助成

## 研修報告書 ( 2014年度 助成者)

作成日 2014 年 8 月 26 日

氏 名	柴田 美音 (しばたみお)
研修先機関名	<u>Hawaii Tokai International College</u>
研 修 期 間	2014年8月13日 (水) ~ 8月20日 (水)
大 学 名	北海道大学
学 年	5年

私が今回参加させていただいた医学部夏期集中英語研修プログラムは、たった1週間という短い期間でありながら非常に濃密で多くのことを学ぶことのできた研修でした。

この研修に参加するきっかけは大学内でのメーリングリストでのご案内でした。医学英語をしっかりと学ぶ機会があまりなく、問診や症例報告を英語でできるようになりたいと思っておりましたが、その方法がわかりませんでした。まさか私が行けるとは思っておりませんでした。応募すれば行ける可能性はわずかにあるが応募しなければ絶対にいけないと思い、応募しました。助成金を頂けてこのプログラムに参加できるという連絡を受け取ったときはとても驚き、飛び上るほど嬉しい気持ちになりました。

研修中は英語での問診や症例報告の方法を学び、ハワイ大学の医学部生を迎えてそれを実践するプログラムがありました。英語で問診を行い、その問診から必要な情報だけを取り出し、鑑別診断の候補を挙げて先生方に報告をするのが非常に難しいと感じましたが、回数を重ねることでまとまった報告ができるようになったと感じられ、先生方からも回数を重ねるほどの確かな症例報告になった言われ、とても嬉しく思いました。今回の研修でその方法を全て学ぶことは難しいと感じましたが、どのような方法が求められるのかというのが分かり、今後の医学英語の勉強に生かしていけると感じています。また倫理観についてのクラスではその日のテーマに関するビデオを見たあと、英語でディスカッションをしました。日本語でさえも説明しにくいことを英語でいかに伝えるかということを知りました。どのように信頼関係を築きながらコミュニケーションをするかというクラスもあり、医師が使うのは医学用語でそれは患者が理解できる言語ではないというメッセージはとても印象的でした。医学部で勉強を続けていると、一般的な表現と医学用語の違いを忘れがちになるのではと思いました。その他にも、アメリカの医療システムに触れる機会もあり、実際にハワイの病院、医学部に見学にも行かせていただきました。アメリカで臨床医としてお仕事されている先生方のお話からはアメリカで日本人医師が働くということはとても厳しいことだろうと感じる一方、先生方はとてもやりがいを持っているように感じました。また、アメリカの医学教育が日本と異なり、疾患から症状を学んでいくのではなく、症状から疾患を学ぶというのはとても実践的という気がしました。ハワイ大学の医学部の学生が問診の練習に来るクラスの最後にはハワイ大学の学生がどのように問診をしていくかというのを、先生が簡単な症例を示してから質問を受け付けるという形で見せてもらいましたが、彼らは症状から疾患を一つの物語のように考えて、診断をしているようでした。疾患から症状、症状から疾患、両方から学ぶ機会が在学中であればより実践的かつ、疾患についても深く理解した医師になれるのではと考えています。

ハワイという土地では多くの日系の方がいらっしゃるため、日本とアメリカの歴史を学ぶ機会もありました。海外から日本の歴史を見ると視点がまったく異なります。それを実感できたのがパールハーバーの見学でした。パールハーバーの直前にルーズヴェルト大統領から昭和天皇に送られた手紙が展示されておりました。医師は誰かを助けるというのが最大の目的です。それを達成するためにも、戦争のような悲劇を起こすべきではないと強く感じました。

この研修は医学英語を学ぶと同時に、医学英語を学びたいと強く志望する学生たちと関わることもできたことも素晴らしい機会となりました。北海道大学からの参加者は私だけでしたので、全国の医学生が何を考えて、どのような目標を持って医学を勉強しているのか、カリキュラムの違いを話し合うことができました。

最後になりましたが、この素晴らしいプログラムに参加させてくださった、日米医学医療交流財団の皆様、

主催者の皆様、参加にあたりサポートして下さった全ての皆様に感謝申し上げます。